

属性コード表の再検討

著者	猿田 佳那子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	019
号	1
ページ	5-11
発行年	1998-03-25
URL	http://doi.org/10.15021/00003540

2. 属性コード表の再検討

「固有属性分析による衣服標本カタログ」(1991年)で使用した属性コード表¹⁾は、A. 色 B. 丈 C. 形態 D. 布地特性 E. 素材 F. 構造技術 G. 部位に分類され、合計97コードからなっている。

われわれは、この属性コード表をもちいて分析作業をつづけてきた。しかし、コード数が多く、判別しにくいコードもあるので、再検討した。前回(1991年発行)のカタログで使用した属性コード表(以下、詳細コード表と略称する)から、今回のカタログで使用している属性表(p. 22)への変更点とその理由をのべる。

なお、前回のカタログで使用した属性コード表、すなわち詳細コード表は、凡例の末尾(p. 29)に掲載している。

2.1 A. 色マーク

詳細コード表における色マークでは、中間色の処理が困難である。また、広い面積を占める色と誘目的な色とが必ずしも一致しない、無地の判断基準があいまい、などの問題もあって²⁾、前回カタログでは、複数の分析者間で判定結果の相違が著しいことがわかった。こうした問題点は、色を数少ないコードの組み合わせで表現することの限界をしめすものであろう。

本カタログでは色マークを削除し、これに替えて、備考欄に色名を記入することとした。備考については、用語や記述内容の統制をしていないので、機械検索における指定対象にはなりえないが、検索結果の画面上で色情報を伝える手段にはなるので³⁾、そのまま採用している。

2.2 B. 丈マーク, C. 形態マーク

これらは、いずれも概念規定が明確であり、分析コードとしては問題がない。C.

1) 大丸 1991: 53-57

2) 以下実際の作業中に発生する問題点については、最も多くの標本分析にあたった山本雅子の判断を参考にした。

3) カラー写真をつければ、およその色はわかる。写真は、色に限らず、多くの情報を提示するのであるが、現段階では、撮影にかかる労力とその効果を検討した結果、撮影を見合わせている標本がある。

第一に、たたみ重ねて収納してある繊維製品を、それぞれの標本にふさわしく撮影できる状態に整えるには、かなりの時間がかかる。第二に、分析作業(撮影の専門家ではない)が撮影しており、色を言葉で表現する以上の誤差が生じることもあり得る。

形態マークは造語であるが、一般の検索者にも容易に理解できるものと思われるので⁴⁾、詳細コード表のままで継続する。ただし、C. 形態マークについては、コードでなく言葉であらわす。

2.3 D. 布地特性マーク

詳細コード表におけるD. 布地特性マークには、つぎの三つの問題点がある。

1. 「わずかでもその特性がある場合はマークする」という原則

標本の表裏にわたって、くまなく点検しなければならないため長時間を要するし、どの程度までを記すか判断にまよう。「D43 (よごれ)」「D44 (いたみ)」「D51 (しわ)」「D53 (のび・ちぢみ)」などの判断はとくに難しい。

2. 巧拙を表現できない

一般に検索者のねらいの多くは、手工芸的な、ある程度手のこんだ技術の標本を探すことではないかと推察されるが、詳細コード表では、簡単なミシンステッチにも緻密な手刺繍にも、おなじマーク「D36 (刺繍)」がつけられる。

3. 判別不可能な技法がある

たとえば、織り糸にそって刺繍すると、紋織りとの区別はつきにくく、極端な場合はどちらの技法をもちいてもおなじものを作りうる。生産効率をもとめない手工芸的な技法には、しばしばこうしたものがある。

こうした問題はあるものの、丈・形態・素材・縫製などにはまったく無頓着であるのに、表面装飾には多大な労力を注いだ標本⁵⁾もおおいことをみれば、このマークを全面的に削除することは実用的でない。そこで、詳細コード表の通り継続するが、「分析者が、著しい特徴をもつと判断した場合にマークする⁶⁾」という前提で作業をすすめた。検出の網羅性は欠くものの、該当の属性をもついくつかの標本をみたいという要求には応えうるであろう。

なお、本カタログでは、地域民族分類が「日本」の標本についてのみ、D. 布地特

4) 展開衣、円筒衣などは、一般にはまったく使用されない造語であるため、既成概念との混同はおこらないであろう。しかし貫頭衣など、歴史的な背景をもつ名称については、注意が必要である。大学生生活科学部2回生にたいし、C. 形態マークの概念規定を説明したのち、1995年8、9月撮影分約500点の標本の写真にコードづけさせたところ、問題なくできた。

5) たとえば、衣服全体にきわめて緻密な刺繍あるいはアプリケがほどこざれているにもかかわらず、裾は裁ち目のままで、前後の丈も不均一なブラウス。

6) 分析者による予備知識の相違を補正するため、これまでの分析作業でえた事例をとりいれた分析マニュアルを作成中である。

性マークを掲載しているが、他の標本についても付与中であり、データベースには追加記入してゆく予定である。

2.4 E. 素材マーク

E. 素材マークは、詳細コード表のままで継続する。ただし、レーヨン（再生繊維）は、再生繊維と表記する。なお、素材マークについては、コードでなく言葉であらわす。調査方法は、主な繊維について、原則として顕微鏡観察と、一部許容される範囲での燃焼試験によって判別した。

合成繊維については、今後の収蔵品の主流になると予測されるため、将来は細区分が必要であろう。

2.5 F. 構造技術マーク

詳細コード表は、いわゆる洋服の技術がいかに「民族服」へ浸透・拡散していったか、という基本テーマにもとづいて設定されたもので、コードの設定それ自体が研究主題の一部であった。本カタログは、広範囲の研究・利用者のための実用性を重視するため、衣服の概要をしめす最低限のコードに絞った。

2.5.1 削除するコードとその理由

・F471（セットイン風）

詳細コード表でいうセットインの定義は、今日の洋裁用語とは異なっているため、洋裁教育をうけてきた検索者には誤解をまねきやすい。一方、洋裁教育をうけていない検索者にとってはなじみのない言葉である。

・F60（肩山にいせがある）

縫い上げたあとでは“いせ”の有無の判定は困難である。

・F11（切りかえに特色がある）、F31（縫目に特色がある）、F72（布はしの処理や縫いしろに特色がある）、F74（布目の扱いに特色がある）

前回カタログでいう「特色」とは、現在の洋裁技法を基準にして、その枠外にあるものをさす。しかし言葉としての「特色」はあいまいで、誤解を生じやすい。

以下の7コードは、衣服全体の構造や着装への影響が小さいこと、または衣服全体の表裏にわたってくまなく点検する必要がある、作業負担が大きすぎる、のため削除する。

・F32（ミシンで縫った箇所がある）

- ・ F40 (重ね縫い)
- ・ F46 (カラーがある)
- ・ F50 (特定部分以外にあき, 切れ目がある)
- ・ F61 (肩山, ウエストゾーン以外にギャザー, タック, プリーツがある)
- ・ F62 (袖山にギャザー等がある)
- ・ F73 (布をつまみ, またはたたんで縫いつけた部分がある)

以下の2項目は, 他項目から類推できるので削除する。

- ・ F13 (肩山線に切りかえがある)

肩部分の構造についてのコードとしては, 他に F59 (肩傾斜) がある。両者を比較すると, 肩傾斜のほうが衣服全体の構成にあたえる影響が大きいので, F59 をのこして F13 を削除する。

- ・ F78 (形態を支持するための, ベつの構造体をもつ)

民博標本では, 縫いつけてない構造体には独立した標本番号が与えられている可能性が高く, この場合, セットであるかどうか判断できない。袴の腰板や, 裱, コルセットの支持物, 詰め物など, 衣服に縫い込んであるものならば, 衣服名から, その存在を推測することができるとおもわれる。

2.5.2 継続するコードとその内容

分析を継続するのは, つぎの11コードである。これらは衣服全体の構造への影響が大きく, かつ分析すべき衣服の部位が特定の。各コードの概念規定は原則として詳細コード表に準ずる。下線部は, 詳細コード表とは異なる範囲指定である。

- ・ F12 (ウエストゾーンに切りかえがある)

ウエストゾーンは広くとる。後ろ身頃のみ, 脇のみなど, 部分的な切りかえは, 「F12?」と記す。アンダーバストに達するようなハイウエストの切りかえは対象外とする。

- ・ F20 (股, もしくは袖付けに襠を用いている)

四肢の動きに対応する部位のみにかぎる。身頃のフレアーパターンや, 体側の足し布は対象外とする。襠布の大小は問わない⁷⁾。

- ・ F47 (袖がついている)

7) 詳細コード表における襠の定義は, 面積の小さいものを指し, 大きくなると「F11 (切りかえに特色あり)」をマークすることとなっていた。しかし, 先に述べたように“特色”の判断を要する「F11」は削除した。したがって, ここにいう襠は, 大きさに関わらない。

袖の有無は、原則として布の切りかえでなくシルエットで判定する。小さな裁ち出し袖や腕の通らないような袖型の部分がある場合は、「F47?」と記す。袋状の衣服で布端が手首まで達するような場合でも袖があるとはみなさない。

- ・ F48 (股, もしくは袖付けに曲線裁ちの部分がある)

股上がきわめて深いような場合、あるいは身幅が広い場合は、衣服と人体の部分とは必ずしも一致しない。

- ・ F49 (バスト, ヒップ, 肩胛骨にむかうダーツがある)

ダーツとは楔状に縫いとじたものにかぎり、いわゆるタックはこれにふくめない。

- ・ F59 (肩傾斜がある)

一般には肩山切りかえにともなって発生するが、身頃全体が傾斜している場合もあり、詳細は布目によって判断する。

- ・ F63 (ウエストゾーンにギャザー等がある)

ギャザー等にはタックやプリーツもふくめる。下半身着の上端だけでなく、上半身着の下端のギャザー等も記す。ウエストゴム入りのギャザーも記す。ウエストに紐を通す部分がある場合は、「F63?」と記す。

- ・ F75 (上半身着, もしくは全身着の身頃がうちあわせ)

詳細コード表では、うちあわせの有無は標準体ポディーに着用させて判定していたが、着用者の体型や着用方法によってうちあわせの程度は大きく異なる。本カタログでは、平置きして判定した。シングルボタン程度以上の重なりを、うちあわせとみなす。ただし、平置きした状態では重なりがなくても、深くうちあわせて着用するように縫い付けられた留め具があるもの⁸⁾は「F75」とした。

- ・ F76 (固定的な留め具をもつ)

- ・ F77 (非固定的な留め具をもつ)

上記二つのコードは詳細コード表の通り。すなわち「固定的な留め具」とは、ボタンやファスナのように、留め具を留めることによって、衣服の各部分と人体の部分との対応関係がおおむね決まるもの。「非固定的な留め具」とは、紐のように、両者の対応関係が流動的なものをさす。

- ・ F79 (左右が非対称である)

身頃の左右のスタイル⁹⁾が極端に違う場合。標準としては、一般的なチョゴリ程度

8) たとえば、左右の衿と両脇とに紐があって、2対の紐を結んで着用する半纏。

9) 詳細コード表では、布の接ぎ合わせが非対称な場合も記していたが、本カタログでは出来上がった形が非対称な場合のみ記した。

であれば記さない。大襟の旗袍程度の違いがあれば記す。

2.6 G. 部位マーク

詳細コード表において、G. 部位マークは、D. 布地特性マークならびに F. 構造技術マークと組み合わせて衣服の部位をあらわすための補助マークであった。本カタログでは、D. 布地特性マークは網羅的には付与しないし、F. 構造技術マークはあらかじめ範囲指定することとしたので、G. 部位マークは不要となった。

今回の属性表について、詳細コード表(略記)からの変更点をつぎの表に対照した。

詳細コード表	変更点
A. 色マーク	削除
B. 丈マーク	変更なし
C. 形態マーク	変更なし
D. 布地特性マーク	分析者が著しい特徴と判断したときに記入
E. 素材マーク	変更なし
F. 構造技術マーク	
11. 切りかえに特色がある (×G)	削除
12. ウエストラインが切りかえ線によって区分されている	ラインをゾーンに変更
13. 肩山線に切りかえがある	削除
20. 襷を用いている (×G)	四肢の付け根部分にかざる
31. 縫目に特色がある	削除
32. ミシンで縫った箇所がある	削除
40. 重ね縫い	削除
46. カラーがある	削除
47. 袖がついている	変更なし
471. セットイン風	削除
48. 曲線裁ちの部分がある (×G)	四肢の付け根部分にかざる
49. ダーツがある (×G)	バスト、ヒップ、肩胛骨にむかうものにかざる
50. 特定部分以外にあき等がある (×G)	削除
59. 肩傾斜がある	変更なし
60. 袖山にいせがある	削除
61. 袖山、ウエストゾーン以外にギャザー、タック、ブリーツがある	削除
62. 袖山にギャザー等がある	削除
63. ウエストゾーンにギャザー等がある	変更なし
72. 布はしの処理、縫いしろに特色がある	削除

73. 布をつまみ、またはたたんで縫いつけた部分がある	削除
74. 布目の扱いに特色がある	削除
75. 身頃がうちあわせ	上半身着または全身着にかぎる
76. 固定的な留め具をもつ (×G)	変更なし
77. 非固定的な留め具をもつ (×G)	変更なし
78. 形を支持するための、べつの構造体をもつ	削除
79. 左右が非対称である (×G)	スタイルの非対称にかぎる
G. 部位マーク	削除

(猿田佳那子)